

平成22年度長期実務実習第1期、第2期を終えて —長期実務実習における薬学実習生の実習状況と教員の役割—

長田 孝司¹、重野 克郎²、曾田 翠¹、梅村 雅之²、脇屋 義文²、山村 恵子¹
¹愛知学院大学薬学部臨床薬剤学、²愛知学院大学薬学部実践薬学

Epitome of New Pharmacy Practice Externship, 2010

New Pharmacy Practice Externship and Commitment of Faculties of Pharmacy School to the "On-site Job Training"

今年度より薬学教育長期実務実習が開始となり、愛知学院大学薬学部においても第1期、第2期それぞれ約100名の薬学生を50以上の実務実習施設(愛知、岐阜、三重、静岡)に送り出した。第1期、第2期実務実習終了後それぞれにおいて実習中の問題点を抽出するためのアンケート調査を薬学実習生に実施した。その結果、長期実務実習に参加した学生の約90%は長期実務実習を有意義だと感じ、50%以上の薬学生は学内での講義や実習が実務実習で役立ったと感じていた。長期実務実習期間中に苦労したことは、日報の作成、自己評価であった。ポートフォリオの作成は、苦労したと感じた割合が第2期で減少した。代わりに第2期には就職活動との兼ね合いに苦労した薬学生がいることも明らかとなった。今年度、実務実習を継続できなくなる事例はなかったが、欠席日数は第2期に増加した。第2期には、企業へのインターンシップなどの就職活動への参加による欠席が含まれているが、実習中の薬学生の体調不良も多かったのではないかと推測された。薬学生が誠意のある態度で実務実習に臨み、高い倫理観と薬剤師としての責任感を身につけられるように指導薬剤師との良好な関係を維持するためには、薬学部教員が薬学生ならびに指導薬剤師と密接なコミュニケーションを継続することが必要であり、すれ違いが生じる前にそれぞれが感じる不満や要望を抽出し、相手へ適切に伝達することが重要であると考えられた。

Keywords: 長期実務実習、学生の意識調査、実務実習担当教員、実習施設訪問、実務実習事前学習

【はじめに】

社会から求められる「質の高い薬剤師」を養成するには、大学での教育が実践できるようになるための長期実務実習が必要不可欠であると考えられ、6年制薬学教育では、薬局、病院それぞれの医療現場における11週間ずつの長期実務実習を実施することが義務付けられている。この長期実務実習は1年間を3期に分け、病院における実務実習と薬局における実務実習をそれぞれ1/3の薬学生が実施することとなり、今年度、愛知学院大学薬学部においても第1期(5月17日～7月30日)、第2期(9月6日～11月19日)それぞれ約100名の薬学生を50以上の実務実習施設(愛知、岐阜、三重、静岡)に送り出した。

この長期実務実習では実務実習施設の指導薬剤師が薬学生を指導することとなっているが、実習期間が11週間と長期にわたるため、さまざまなトラブルや問題点が発生するものと考えられる。特に学校とまったく異なる環

境で学習することは、一部の薬学生にとって大きなストレスになり、体調の不良や学習意欲の低下などに繋がることが予想される。

全国に先駆け愛知学院大学薬学部では、長期実務実習に関連する問題を速やか抽出し、回避するための実務実習担当実践薬学部部門を設置し、実習先の医療施設への訪問、そして薬学生への指導の効率化を図り、実習中の薬学生への支援を充実させている。しかし、第2期実務実習は第1期実務実習と異なり、実務実習を行った薬学生と初めて実務実習を行う薬学生が混在しており、実務実習経験の有無による知識、技術、態度のギャップが指導薬剤師の戸惑いとなり、一緒に学習する薬学生の負担となるのではないかと考えられる。

今回、第1期、第2期実務実習終了後にそれぞれ実施したアンケート調査の結果に基づき、薬学実習生の実習状況について検討した。

Corresponding author.
Takashi Osada
Tel: +81 52 757 6766; Fax: +81 52 757 6799
E-mail address: t-osada@dpc.agu.ac.jp

【方法】

実務実習に関するアンケート調査は、実務実習終了2週間後の実務実習成果の提出日に実務実習参加学生(第1期：93名、第2期：100名)を対象として実施した。このアンケート調査は、実習中の問題点を抽出することを目的としているため、記名方式とした。このアンケート調査では、1. 長期実務実習が有意義であったか、2. 学内の事前学習が役立ったか、3. 実習中に苦勞したこと、4. 教員への相談事項の4項目に加え、①実習施設、②指導薬剤師、③大学、④WEBシステムなどに対する改善・要望事項を調査した(図1)。

【結果】

1. 長期実務実習の実施状況

平成22年度愛知学院大学薬学部における長期実務実習は、第1期(5月17日～7月30日)に病院実務実習40名(実習先29施設)、薬局実務実習53名(実習先44施設)、第2期(9月6日～11月19日)に病院実務実習47名(実習先32施設)、薬局実務実習53名(実習先42施設)で実施した(表1)。また、第3期(1月11日～3月25日)には、病院実務実習56名(実習先25施設)、薬局実務実習37名(実習先34施設)が実施される予定となっている。

第1期の出席状況(延べ日数)は、欠席19日、遅刻3日、早退14日であったが、第2期の出席状況(延べ日数)は、欠席51日、遅刻5日、早退8日であった(図2)。

実習先施設		薬局	病院	合計
学生数	第1期 平成22年5月17日 ～ 平成22年7月30日	44施設 53人	29施設 40人	73施設 93人
	第2期 平成22年9月6日 ～ 平成22年11月19日	42施設 53人 *(12人)	32施設 47人 *(38人)	74施設 100人 *(50人)

*第1期実務実習経験学生

表1. 実務実習実施学生数

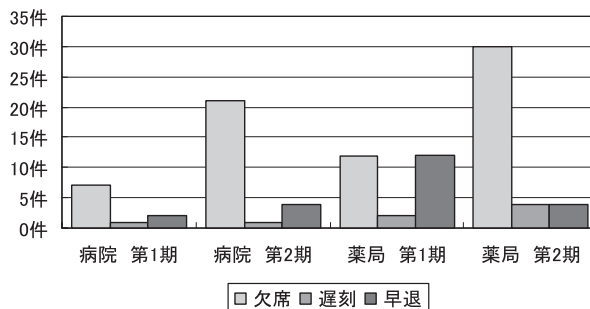


図2. 実務実習出席状況(延べ日数)

長期実務実習 第 期終了時 実習生調査票

平成 年 月 日

学籍番号: _____ 所属講座: _____ 氏名: _____

実習施設名: _____

- 長期実務実習は有意義でしたか?
 はい どちらともいえない いいえ
- 学内での事前学習の講義と実習は、長期実務実習に役立ちましたか?
 講義: はい どちらともいえない いいえ
 実習: はい どちらともいえない いいえ
- 長期実務実習中に苦勞したことは何ですか(複数回答可)
 施設への通学 実習の準備日誌(日報)の作成
 ポートフォリオの作成 WEBによる自己評価
 職員との人間関係 学生との人間関係 大学の対応
 困った時の相談先 就職活動との兼ね合い ハラスメント
 その他(具体的に: _____)
- 教員に個別に相談や報告したいことがありますか?
 はい いいえ
 ①実習施設、②指導薬剤師、③大学、④WEBシステム、⑤その他
 に改善して欲しいことや要望、提案があれば記入してください。
 () (具体的に: _____))
 () (具体的に: _____))
 () (具体的に: _____))

図1. 長期実務実習調査票

2. 実務実習施設への訪問状況

実務実習施設への訪問は、第1期、第2期ともに全実習受け入れ施設に対して事前訪問1回と実習中訪問3回の合計4回の訪問を実施した。事前訪問では、ゼロックス実務実習支援システムの使用や形成的評価などの愛知学院大学薬学部の実務実習方針の説明と薬学生情報の提供に加え、実習開始の準備を確認した。実習中訪問は、実習中薬学生の支援ならびに指導薬剤師への形成的評価を促すことを第一目的とし、1回目の訪問では指導薬剤師および実習施設と薬学生とのコミュニケーション状況の確認、2回目は実習に対するモチベーションの維持ならびに调剂過誤防止、3回目には学校へ提出する実習成果についての説明などを行った。

実務実習担当実践薬学部門の教員5名と嘱託薬剤師4名で、第1期には薬局訪問は事前訪問の86回を含む239回、病院訪問は事前訪問45回を含む121回実施した。同じく第2期には薬局訪問は事前訪問の47回を含む168回、病院訪問は事前訪問24回を含む106回実施した(表2)。

3. 実務実習終了後のアンケートの結果

長期実務実習に参加した学生の約90%は長期実務実習

実習先施設	薬局	病院	合計
第1期	153回 *(86回)	76回 *(45回)	229回 *(131回)
第2期	121回 *(47回)	82回 *(24回)	203回 *(71回)

*実務実習事前訪問

表2. 実務実習施設訪問回数

を有意義だと感じているが、5-9%の学生が有意義とは言いがたいと思っていることも明らかとなった(図3)。病院実務実習、薬局実務実習ともに50%以上の薬学生が学内での講義が実務実習で役立ったと感じていた(図4)。また、学内での実習は講義以上に役立っていると感じた薬学生が多く、その割合は薬局実務実習に比べ、病院実務実習の方がわずかに高かった(図5)。

長期実務実習期間中に苦労したことでは、日報の作成

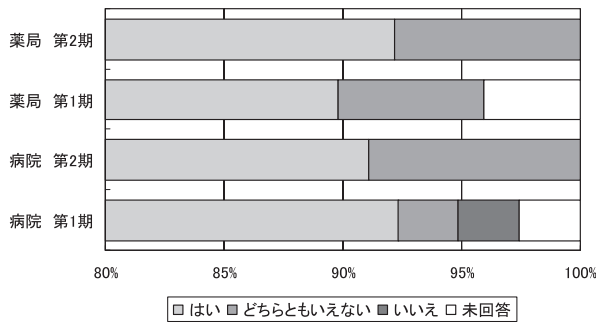


図3. 長期実務実習は有意義でしたか。

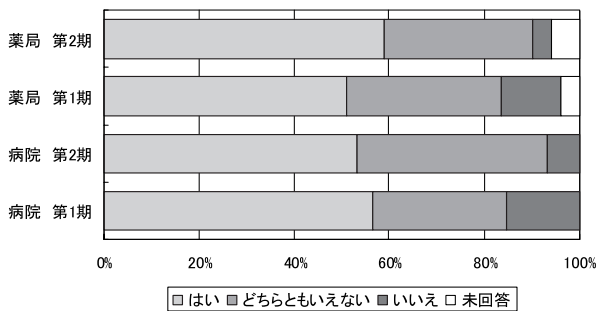


図4. 学内での事前学習の講義は、長期実務実習に役立ちましたか。

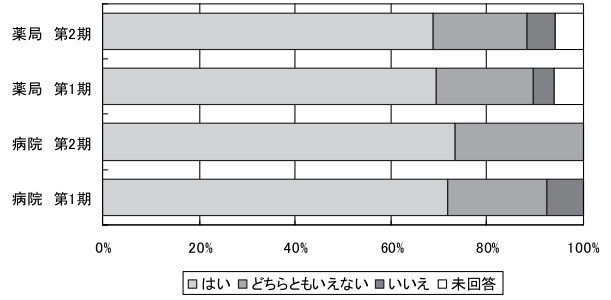


図5. 学内での事前学習の実習は、長期実務実習に役立ちましたか。

ならびに自己評価が場所・時期に関係なくすべてにおいて多かった。ポートフォリオの作成は、第1期では、薬局実務実習・病院実務実習ともに苦労したと感じているが、第2期にはその割合は減少していた。代わりに第2期には、就職活動との兼ね合いに苦労した薬学生がいることも明らかとなった(図6)。

教員に対して個別に相談や報告したいことについては、第1期では病院実務実習10.2%、薬局実務実習8.2%であったが、第2期ではそれぞれ4.4%、5.9%と減少していた(図7)。

改善および要望については、WEBシステムに対するものが一番多く、大学への要望は第1期には高かったが、第2期には減少していた(図8)。

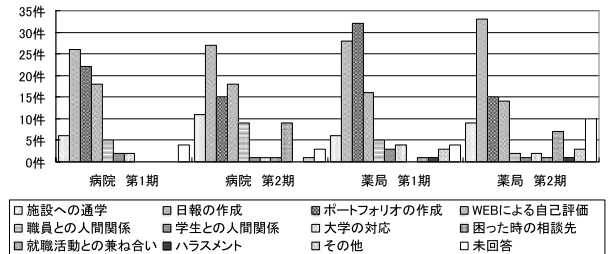


図6. 長期実務実習中に苦労したことは何ですか。(複数回答可)

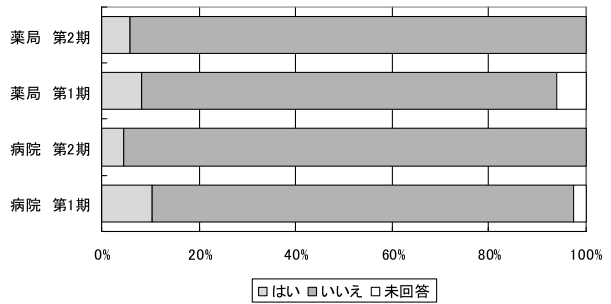


図7. 教員に個別に相談や報告したい事がありますか。

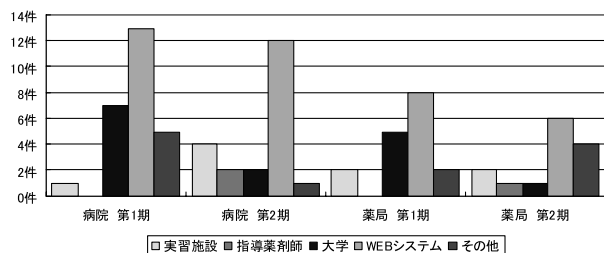


図8. 改善してほしい事や要望
実習施設、指導薬剤師、大学、WEBシステム、その他
(複数回答可)

【考察】

今年度より開始された長期実務実習は、薬学4年制教育時に実施されていた見学型実習ではなく参加型実習とし、薬剤師業務に必要な基本的知識、技能、態度を修得することを一般目標としている。そのためには、実習内容の質を均一化することが重要であると考えられ、「実務実習モデル・コアカリキュラム」¹⁾にしたがって、薬局・病院それぞれ275コマ（1コマ90分）の実務実習を行うこととなった。実習受け入れ施設において指導する薬剤師も実務実習指導薬剤師養成ワークショップ等に参加し、「実務実習モデル・コアカリキュラム」を十分理解して実務実習に臨んでいる。

長期実務実習を受け入れるためには適切な数の実習受け入れ施設ならびに指導薬剤師が必要となるが、一度にすべての薬学生の受け入れだけの数を確保することは難しく、1年間を3つに分割して1/3ずつの薬学生が薬局実習・病院実習をそれぞれ実施することとなった。そのため、第2期には実務実習経験者と実務実習未経験者が混在して実務実習を行うこととなった。今回、実習経験にばらつきのある実務実習が薬学生にどの程度の負担となったのか検証するために、実習終了後に実施した実務実習に対するアンケート調査を第1期と第2期を比較検討した。

当校の第2期実務実習では実務実習経験者と未経験者が半数ずつ参加していたが、第1期と第2期の実務実習実施学生数、受け入れ施設数ともに大きな差は見られなかった。また、実務実習中の訪問回数は第1期219回、第2期203回であり、第1期には複数教員による訪問が行われたことを考慮すると、実務実習中の支援体制にも大きな差はなかったと考えられる。

第1期、第2期ともに実務実習を途中で継続できなくなる事例はなかった。しかし、第2期の欠席日数が第1期と比べ、2.5倍となっていることは、企業へのインターンシップなどの就職活動への参加によるものも含まれているが、実習中の薬学生の体調不良が多かったのではないかと推測される。

教員に対して相談したいことは第1期に比べ、第2期が少なくなっているが、指導薬剤師に対する要望が第2期には0件から3件となっていることや病院における職員との人間関係が難しいと考える学生が5件から9件に増えていることより、第2期実務実習では、薬学生の知識不足・応用力不足ではなく、薬学生と指導薬剤師の人間としてまた医療人としての常識に格差が問題となり、出席状況に影響していると考えられた。実際に我々教員は受け入れ施設を訪問したり、地域の連絡会に参加したりしたときに指導薬剤師より指摘されることは、5分ではあるが遅刻しても謝罪の言葉もなく、当たり前のような態度や、休憩時間など患者さんの前であっても普段と変わらぬ大柄な振舞い、与えられた課題の提出遅延など、モデル・コアカリキュラムに含まれていない些細なことであった。鈴木らは、この長期実務実習では実習を受け入れる薬剤師が薬学生に対して「知識」、「技術」よりも「態度」を修得してほしいと期待していることを報告している²⁾。薬剤師としての基本的な態度については、学校で十分な態度教育がなされていないことや受け入れ施設間においても認識にばらつきがあり、指導薬剤師が教育しにくい項目であると思われる。実際に上記のような事例は、指導薬剤師も注意したほうがよいのかどうか迷う事柄であり、注意するタイミングを逸してしまうとなかなか注意しづらいものである。薬学生は注意されなければ問題であることに気づかずそのまま繰り返し、これが周りの医療スタッフの不平・不満や患者からのクレームとなり、徐々に大きな問題へと発展していくと考えられる。指導薬剤師以外の薬剤師からの不平・不満は、実習指導の態度や言葉の変化となって表れ、実習中の薬学生に違和感やストレスを覚えさせる。このようなほんのちょっとしたすれ違いが薬学生や指導薬剤師のモチベーションを低下させるのではないかと推察された。

薬学生が誠意のある態度で実務実習に臨み、高い倫理観と薬剤師としての責任感を身につけられるように指導薬剤師との良好な関係を維持するためには、薬学部教員が薬学生ならびに指導薬剤師と密接なコミュニケーションを継続することが必要であり、すれ違いが生じる前にそれぞれが感じる不満や要望を抽出し、相手へ適切に伝達することが重要であると考えられた。そのため、実務実習期間のみならず1年間を通じて実習受け入れ施設の薬剤師との交流を実施し、実務実習の支援体制を強化していかなければならないと感じている。また、この長期実務実習では指導薬剤師と薬学生との人間関係がうまくいかない場合の対処方法や人間関係がどのような状態になったときに介入すればよい（のか）という基準が明らかではないことが問題だと考えられるので、トラブル事例発生の対処方法の明確化を近隣大学、県薬剤師会、県

病院薬剤師会と協調し、検討しなければならないと考えている。

【引用文献】

1. 文部科学省、実務実習モデル・コアカリキュラム
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/022/toushin/04052401.htm
2. 実務実習事前学習に対する実務実習受け入れ側の意識調査と解析 日本大学薬学部における取り組み、鈴木慎一郎、濃沼政美、日高由加里、小池勝也、中村均、薬学雑誌、129巻9号、1103-1112、2009.09